

現代中国におけるイマージョン 英語教育に関する考察 —陝西師範大学附属小学校での実践に焦点を当てて—

新保 敦子

日本においては、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が2013年12月13日に文部科学省により公表された。そして、2020年を目処に、現在、小学校5・6年で外国語活動として導入されている英語の教科化、さらに、3・4年生で外国語教育活動の導入が、実施の方向性にある¹。

一方、中国ではグローバリゼーションの大きな潮流に呼応する形で、日本に先んじて、2001年以降、小学校3年生からの英語教育が必修化され、正式にカリキュラムに組み込まれている。

それでは、具体的に中国では、どのような取り組みが行われているのか。中国語は英語とは異なる言語体系であり、教育現場に導入するのは、かなり困難があったと思われるが、その点をどのように克服しようとしてきたのか。

これまで筆者は先行研究において、中国の少数民族地域における小学校英語について論じてきた²。本稿においては、中国の都市部で実験的に実施されているイマージョン教育（「浸入式」）について検討することを通じて、現在の中国における小学校英語教育の現状と直面する課題について考察していきたい。また日本の小学校英語教育にとっての情報提供も、目指している。

イマージョン教育とは、第2言語を道具として使ってその他の教科を教授する教育である。一般的に、アメリカあるいはカナダで実施されているイマージョン教育では、通常50%以上を **target language**（習得しようとしている言語）で教授している場合、イマージョン教育と呼称している。しかし、中国で行われているイマージョン教育は、第2言語（英語）を使って一部の教科を教えるというものである（「半浸入式」）。厳密な意味では、イマージョンというよりも、**CLIL**（**content and language integrated learning**、英語の語学学習と理科や社会などの教科学習を統合しようとするアプローチ）と言った方が適切かもしれない。

しかしながら、英語を使って他の教科を教授しようとする先進的な取り組みは、日本にとっても参考になると思われるため、紹介していきたい。

本稿は、2016年11月2日～3日に行われた陝西師範大学附属小学校及び陝西師範大学実験小学校での調査の記録をもとにしている。授業への参与観察、担当教員及び学校関係者への聞き取り調査、関連資料に依拠しながら論じていくことにする³。

1, 中国における小学校英語教育

中国における一連の急速な英語教育の導入は、2000年代初めから開始している。そして2001年の「全日制義務教育英語課程標準」の実施によって、英語教育は小3から正式にカリキュラムに組み込まれ必修化されることになった。

必修化の直接の契機としては、2001年のWTOの加盟と、2008年の北京オリンピックを指摘できる。そして、初等教育では英語が必修とされ、前期中等教育では英語、日本語、ロシア語の3言語の中から選択することになっているものの、実態としてはほとんどが英語選択である。「課程標準」では、小3から高3までの10年間を視野に入れて一貫した指導体系になっている。小3から実施とはいえ、北京、上海、天津、また全国の31の省都などの大都市では、ほぼ小1から100%実施されているのである。

その間、教育部は「義務教育課程設置実験方案」(2001年11月)を提示し、外国語は、カリキュラム全体の6～8%とすることを規定した(40分授業に換算して週約2コマ)。また、地域や学校の実態に応じて弾力的な運営が可能な「課程標準」への移行に伴い(従来は全国統一の「教学大綱」)、地方や学校の実情に基づきながら外国語教育の弾力的な導入が図られることになった。

日本と比較すると、中国の小学校英語教育は、以下の特徴があることが指摘できる。①小学校3年という早期の段階から英語教育が導入されていること、②都市部では、小学校1年、あるいは幼稚園の段階からの英語教育が活発に展開されていること、③週2コマと規定されているものの、実際は、週時間数が4コマ以上といった所も多いこと(他の科目・例えば「校本課程」(学校独自カリキュラム)の利用)、④小学校から高校までの一貫した教育体系の中で、英語教育が実施されていること(陝西省のように省によっては、高校までが義務教育になっている地域もあり)、⑤英語教員が不足している農村部においても英語教育を実施するため、教材開発が進んでいること、⑥小学校英語の専科の教員が担当していること、⑦英語の授業での教授言語は基本的に英語であること(中国人の教師が英語を使って教える)、以上である。

⑥に関して、筆者は中国の小都市、農村部などでも英語の授業を見学したことがあるが、教授言語は英語である小学校が多数を占めていた。つまり、小学校の段階から、英語は英語で学ぶということが、常識になっている。2001年以降、中国では英語教育を大胆に導入しており、ネイティブ教師に頼らなくても、英語で英語科の授業ができる中国人の英語教師が大量に存在する、という点は注目に値しよう。

2、中国におけるイマージョン英語教育

中国における小学校英語におけるイマージョン教育の導入は、1997年から始まっており、「中国、カナダ、アメリカの教育協力による英語イマージョン教育研究プロジェクト」は、第10次5カ年計画期間（2001年～2005年）において、教育部の重点課題であった⁴。そして1998年から2004年まで、6年にわたって、実験がおこなわれた（第1期）（現在も同プロジェクトは継続中）。

イマージョン教育の導入の背景としては、5つを指摘できる⁵。

- ①英語を身につけることに対して、社会的に切迫した要求があったこと。英語は、国際的なコミュニケーションのための言語であり、情報時代の重要な道具である。20世紀の90年代以来、中国の小学校や幼稚園では、英語の授業が実施されており、社会、そして何よりも親から歓迎されていた。
- ②第二言語教育、外国語のイマージョン式の教育モデルが、世界の外国語教育の改革に伴い積極的に導入されつつあったこと。外国語教育の低年齢化、外国語教育と学科教育の統合が図られるようになった。
- ③長期にわたって中国の英語教育は、時間をかけながら効果が少ないことが問題であったこと。学生の英語でのコミュニケーション能力は乏しく、時代の要請に答えきれていなかった。
- ④カナダにおけるイマージョン教育の成功。カナダにおけるフランス語イマージョン教育をモデルとして、中国においてまず女性及び少数民族に対する英語教育の研究プロジェクトが進められることになった。
- ⑤中国の幼稚園におけるイマージョン型英語教育の実験の成功。

こうして陝西省西安市の5小学校で実験が開始されることになった⁶。5校の内訳は、労働者の子女の多い学校2校、幹部の子女が多い学校1校、知識人家庭の子女が多い学校1校、社会の各階層（下層を含め）の子女が集まっている学校1校である。

第1段階（98年9月～2001年7月）では、英語、品德与生活、音楽、美術、体育、自然の6教科、授業の半分（週約30コマのうち半数の15コマ）が、英語を教授言語として授業が行われることになった。

英語以外の5教科（品德与生活、音楽、美術、体育、自然）は、国家9年制義務教育に則った教材が、プロジェクトチームによって英語に翻訳された。ただし効果は顕著だったものの、翻訳は教師にとって負担が非常に重かった。

第2段階（2001年9月～2004年7月）には、イマージョン教育による授業数が減少し週15コマから8コマとなった（イマージョンによる授業が20～30%、漢語による授業が70%）。その理由としては、教師の確保が非常に困難であったことがあるという。例えば、音楽、美術、体育の場合、その分野の専門性を持ちながら、英語が流ちょうに話せる教員の確保は、難題であった。

ただし、2000年代以降、中国における全国的なカリキュラム改革に伴って、従来の教科の枠組

みに沿ったカリキュラム体系が大胆に改革され、テーマ別による教育が積極的に取り入れられるようになった。国語、数学以外の学科については、英語イマージョン型の総合科目が、実現することになった。たとえば、1～2年生においては、「総合テーマ教育」(品德与生活、音楽、美術、体育、英語の5教科を含む)が実施され、3年～6年生においては、社会、科学、英語、体育、美術の教科の中で、イマージョン型が導入されることになった。

アメリカでの第2言語イマージョン型の実践研究の結果、主題単元を外国語で行う総合科は、教科と言語の習得という両面から効果があることが実証されており、このこともイマージョン教育の導入を後押しした。

8コマの中で、どの教科を取り上げるのかは、各学校によって異なる。指導できる教員がいるかどうかによるためである。

小学校英語教育におけるイマージョン型の教育の課題としては、①教員の養成、②教科書の開発がある。さらに、③イマージョン教育をどのように評価すべきなのかというのも課題であるという。外部の見学者は、イマージョン教育を見て驚きの声をあげる。しかしながら、中国の実情にあったイマージョン教育とはどういったもので、どのようにイマージョン教育を評価すべきなのかに関して、明確な指標が定められているわけではない。そのため今後、どのように改善すべきなのかについても検証が求められているという。

また、④少ない時間数(週8コマ)、かつ児童の負担軽減で宿題があまり出せない状況の中で、どのように英語のイマージョン教育を進めるのかという課題もある。

以下では、こうしたイマージョン教育の先進の実験校である陝西師範大学附属小学校及び陝西師範大学附属実験小学校におけるイマージョン教育の事例を紹介したい。

3. 陝西師範大学附属小学校

(1) 概況

陝西師範大学附属小学校は、陝西師範大学の構内に立地する学校である⁷。児童は陝西師範大学の教職員の子供が多く、いわばインテリ層の家庭の子供が通う学校である。

同校では、1998年から、イマージョンの実験に取り組んでいる。以前は、授業時間数30コマのうち、半数の15コマが、英語での教育であった。しかしながら、①英語で教えることのできる教員不足、②児童の負担軽減の潮流、③英語重視から古文重視への流れ(習近平政権下での教育改革)、といった要因があり、現在は、各学年週8コマとなっている。週8コマのうち、4コマが英語、4コマが英語を使って教える他の授業(思想与品德など)である。

従来は教師に限りがあることから、イマージョンのクラス数を1学年3クラスに制限していた(入学時に英語のテストをして、イマージョンのクラスかそうではないか振り分け)。しかしながら、親の希望もあり、2016年に入学した1年生は、すべてのクラスがイマージョンとなっているという。同校は約2000人規模の小学校であるが、その半数の約1000人がイマージョンのクラスに属してい

ることになる。

教科書は、1～2年は英語の通常の教科書の他、『総合英語』（独自に開発されたテキスト）を使用している。3年～5年は、思想与品德、体育、reading、フォニックスの4教科が英語で行われている。6年は中学入試があるため、readingと英語が中心である。

ちなみに、高紅健元校長（全国優秀教師の一人、同校に10年来勤務）によれば、在職時には、NYの学校とのサマーキャンプやシンガポールの姉妹校との交流など、活発に実施していた。ただし、現在は低調という。習近平政権となつてから、中国の伝統を重んじる政策が採られており、学校教育現場でも「国文」（古文に相当）が導入されるようになってきている。そのため、イマージョン教育や国際交流は逆風の中にある。

英語担当教師にインタビューしたところ、A先生は、西安外国語大学・学部卒業後に同校に採用され、3年目である。週担当コマ数は、14コマである（イマージョンクラス7コマ、普通クラス4コマ、早読3コマ）。北京大学附属小学校で英語教師に担当コマ数を聞いた時には、週20コマで、また北京は20コマの教師も少なくないということだったので、授業負担は北京の学校よりは恵まれているかもしれない⁸。

B先生は、北京交通大学大学院修士課程を2016年9月に卒業したばかりである。学部は小学校英語教育、修士は通訳を学んだ。

(2) フォニックス（1年）

1年生のフォニックスの授業を参観したが、クラスは40人、担当はA先生である。児童は入学して2ヶ月間、小学校で英語を学んだ段階である。

当日の内容は、「lesson7 My Body」であった（『清華大学版・小学英语』）。黒板に、head, nose, ears, eyes, foot, handsの文字が書かれた紙が貼られている。

まず、パワポのスライド（My Body）が提示される。スライドには、「Touch your ears./ Touch your nose./ Close your eyes. /Nod your head. /Shake your head. /Wave your hand./ Clap your hands. /Stamp your feet. / Open your mouth. / Say OK」とある。それぞれの動作を、児童にやらせる。その後、教室の前に5名の児童が出て来て、動作を行っていた。Inputを次々に与えて、理解できているかどうか動作で示す手法（TPR, total physical response）である。

次に、モンスターの絵と「What does the monster have?」に続いて、「It has one nose. It has one mouth. It has 5 feet. It has 4 ears. It has three eyes.」のスライドが提示され、「It has・・・」という構文を学習する。

スライドの中に、クラスの児童Kevinの写真もあり、「Kevin has・・・」という構文を学習する。児童の英語の名前を教師が次々に呼び質問をしていく。教師のテンポが速く、児童も次々に手を挙げる。入学してから2ヶ月と間もないが、大変に活発だ。

また、黒板上にJanny, Jerry（骨格だけの人形）があり、「I have for ears.」といったスライドの

指示に従って、着せ替え人形のようにパーツを貼り付ける作業を、児童に行わせていた。

40 人のクラスが、一班と二班とに分かれていて、班のメンバーが発言したり問題に正答したりすると、黒板上に描かれた線の上のコマを一つ進める形になっている。二つの班を相互に競わせながら、児童の積極性を促しているのである。ただし、ある男児が間違えた答えをいったところ、近くの男児がその児童を責めているという、小学校でありがちな光景も観察された。

次に、「Let's show your little monster.」の教師の指示で、児童が、自分で描いたモンスターを取り出し、一斉に見せていた（宿題として家で描いてきたものを持参）。教師は何人かの児童を指名して、教室の前でモンスターについての説明をさせていた。教師は児童の描いたモンスターの絵を、OHC を利用して、クラスの児童に見せていた。ある女児は、「It's my monster. It has 5 mouths. It has 3 eyes. It has 4 hands. I love it!」と言っていた。

ただ、数名、持ってきていない児童もいた（後で教師に確認した所、持ってくるのを忘れたとの説明であった）。また、授業の後半になると、集中力が切れている児童やまったく挙手しない児童もいた。後で先生に聞いたところ、40 人のクラスの内、5 人くらいは海外での経験があり英語がよくできるという。このあたり、担当の A 先生も、クラスの中で、差があるのが課題であると語っていた。

最後に、宿題が出されていた。「Monster University」（Disney Pixar。動画共有サイトである優酷に 3 分程度の予告編がアップされている）を見るのが宿題という。宿題は、だいたい、20 分程度でできるものとのこと。児童の負担軽減という観点から、現在では、それほど多くの宿題を出すことはしないという。

A 先生は学部卒業後、3 年の経験であるが、表情も豊かである。授業の構成もビデオを取り入れながら、児童が「聞く」、「話す」を積極的に行えるような工夫がなされていた。ネイティブでなくても、これだけ高度な内容の授業ができることに正直、驚かされた。中国では、2001 年から全国的に小学校英語教育を積極的に実施してきたが、そこで育ってきた層が小学校英語教師として教鞭を執っていることに注目したい。

(3) 思想品德（4 年）

英語で行う 4 年生の思想品德の授業を見学した。クラスは約 40 人である。教室の壁には、児童一人一人の額縁に入れられた写真が飾られていた。児童を大切にしていることが伝わってくる教室である。

担当の B 先生は、大学学部では小学英語を学び、北京交通大学修士（翻訳）を昨年 9 月に卒業したばかりである。

内容は「lesson3 Two Bills」。内容としては、アメリカ人の少年である George が、おもちゃが欲しかった。でもお金が無かった。そこで、家事を手伝って、お小遣いを稼ごうとした（母親へ請求書を出した）。しかし、母親は皿洗いなどの家事をするが、George に請求書を出さない。これは

どうしてか。子どもを愛しているから請求書を出さないのである。では、子どもがお手伝いをして親に請求書を出すのは、いいことなのか、悪いことなのかを考えようという内容である。

まず「Thinking Q1 What does George want? / Q2 Does he have enough money?/ Q3 What's his idea?」というスライドの提示がなされ、児童に答えさせていた。その後、「Wash dishes/ Water plant/ Make up the bed/ Dust the desk/ Mop the floor (それぞれ1ドルと教科書に書かれている)」という単語が黒板に示される。

その後、教師から、「What can you help?」という質問が出され、手伝いの内容を、児童に答えさせていた。

「What does George get from doing the housework?」の質問のあと、Georgeが母親にBillを出したことが確認される。

その後、「the things mom did in our daily life」が質問され、「Take me to go for travelling/ Take care of me when I am sick/ Pick me home in rainy days/ Help me with school work/ Cook dinner for me/ Wash dishes for me/ Read stories for me/ Help me for schoolwork」と、母親が毎日やることが示される。

続いて、母親が子どもの世話をしている様子を描いた動画絵本を児童に提示する。

そして、「Talk about this story with your classmate. Do you think George should be paid? Mother asks for nothing in return, why? What can we learn from the story?」という質問が出され、班(4人1組)でグループ・ディスカッションがなされる。児童は、英語で議論をしていて、普段から漢語を使わないように指導がなされていることが伺える。

グループ・ディスカッションの終了後、母は、子どもの世話をしても請求書を出すわけでもなく、金を得ることはない。Georgeが母親に請求書を出したのは、正しいかどうか、教師が児童に聞くと、児童は一斉に「wrong」と答えていた。

手伝いは、親を思う心からすべきである、ということらしい(ちなみに、教科書には、「George knows he is wrong.」続いて、Georgeが母に「I am sorry I give you bill.」という例文が示されていた)。ただし、B教師は、お手伝いをするのは良い、ただし、お手伝いをして、小遣い稼ぎを考えることは間違っているとの説明であった。

最後に、2分間の時間をとって、Writingの課題として、① Write down the things your mom do to you. ② Write down the things you do at home. という課題が提示された。この課題を行う間、心地よい音楽が流されていた。指名された児童は、set the table, sweep the tableと答えていた。

宿題は、②の手伝いについて、実際にやる(親の承認印をもらってくる)、というものであった。

クラスの中に、英語が大変によくできる女兒がいたが(前から2列目、右)、アメリカから帰ってきたばかりとのことであった。一方、児童のほとんどは、1年に入学した時にゼロから英語を学び始めたにもかかわらず、英語を使って議論しようとするなど、かなり意欲的に英語を話していた。

(4) 反省会

2人の先生の授業を見学したあと、反省会が開かれた。反省会には、イマージョンプロジェクトの担当者である西安外国語大学の教員や、他校の英語教師、及びこの学校の英語教師も参加していた。

かなり率直な意見の交換がなされたのが、印象的であった。たとえば、A先生の授業に対しては、児童が叫んでいるようだったが、叫ぶ必要はないのではないか、との指摘があった。

また中国語を使わないように注意をすべきであり (Don't speak!), 英語で話をした時に、ほめるようにした方がよいという意見があった。

さらにPPTや教材の中に、漢語が入っているものがあったが、漢語があると、より簡単な方を見るので、漢語が無いものを選ぶべきではないかとの指摘もあった (宿題で出された **Monster University** の動画には、漢語と英語の字幕あり)。

B先生の授業に対しては、授業の導入の部分で挨拶に続いて、「Are you happy?」と教師が問いかけていたが、これは唐突なので、言うのであれば、まず「I'm happy」と言ってからの方がいいのではないか、という意見がでていた。

また、Georgeがbillを母に出したことに関して、wrongというのは、良くないのではないか?との指摘があった。たとえば、アメリカでは、お手伝いをして稼ぐが、これは良くないことなのか。いろいろな考え方があるのではないか。教科書には、wrongと記されていて、教師はそれに沿って授業を行っているわけであるが、もっと多様な考え方を児童ができるように導いても良かったのではないかという意見が出されていた。これは傾聴に値しよう。

2人の先生に共通する課題として、もっとグループ学習を取り入れることで、個々の児童が発言する機会を増やすべきである (以前、付属小学校はもっとグループ活動を取り入れていた)、という意見もあった。

4、陝西師範大学実験小学校

(1) 概況

陝西師範大学実験小学校は、2013年に創設された学校である⁹。陝西師範大学付属小学校の校長であった高紅健校長が新任の校長となり、教師たちと一緒にゼロから立ち上げた。

この地域は、民国時期 (1912～1949年)に河南省で黄河の氾濫があった時に、逃げてきた人たちが移住して形成されてきた地域である。そのため、西安市の中では、社会的下層が居住しているという。

当該実験小学校は、陝西師範大学の付属といっても私立学校である。中国の場合、国立大学付属の中にも私立学校が多くある。公立校が私立学校を経営しているケースも少なくない。ただ、私立学校であるため、戸籍を持たない出稼ぎ農民の子どもも受け入れており、同校では約6割が、出稼ぎ農民の子どもという。確かに、表情にも農村出身の子どもの面影を留めており、また下校時に送

迎に来ている祖父母もいかにも農民の風情であった。

高前校長に聞いたところ、親が農民なので、親の教育が大変だったという。親を集めての集会の時も、大声で携帯電話で話していたのを一度ならず注意をしたそう。また、毎朝、校長や教職員が校門に立って登校指導をした。たとえば子どものカバンを親（祖父母）が持とうとするので、子どもに持たせなさいと、やり直しをさせたという。

通常、教員採用において、大学卒業したての教師は歓迎されない。しかし、当該校では、高前校長の方針の元、新任教員を採用して、1人前の教師として育てることを重視してきたという。高前校長は、2015年の9月に退職したが、日本からの来客のためにアテンドで同行してくれた。高前校長を見たところ、教職員が次々に駆け寄ってきて、抱きついてきた。ある先生は感激のあまり、涙ぐんでいた。こうした高前校長のリーダーシップと人柄によって、同校でのイマージョン教育の実験が推進され、効果を上げていると感じた。

現在、同校には小学校1年～4年が在籍し、児童数は約1500人である。業間の休憩時間に展開されている体操を見学したが、1500人による体操は壮観であった。訓練が良くされているので、号令をかけずに音楽だけで児童が動いていた。このように音楽だけで児童が動く学校は少ないという。

(2) フォニックス (2年)

クラスは約40人で、1年に入学して初めて英語に接する児童がほとんどである。児童は1年時から、毎週8コマ、英語での授業を受けてきている（英語学習歴は、1年2ヶ月）。

C先生は大学を卒業した後に新任教員として当該校に赴任し、教歴は3年である。

「Sound of letters ee」が当日の学習内容である。指導案には、次のように記されている¹⁰。

- ① コースの目的 1) eeについて理解する。2) eeといった文字を含んでいる単語を発音する。3) eeを含んでいる新しい単語を学ぶ。4) eeを含んでいる単語を使って、文章を作る。5) 正確な発音、イントネーションで、物語を読む。

② 学習の戦略

- 1) しっかりと注意深く聞く。活発に学び、幸せに学ぶ。2) 他の仲間と協力しながら学ぶ。3) 学んだことを自分で練習する。

③ キーポイント

- 1) eeを使った物の名前を知る。2) eeを使った新しい単語の正確な発音を知る。3) 正確な発音及びイントネーションで物語を読む。

学習の流れは以下の通りである。まず、ウォーミングアップとして、フォニックスの歌と一緒に歌い、学生の興味を引き起こし、以前学んだことを確認する。次に導入部分で、5人の児童が教室の前に出てきて、3匹の蜂と羊に扮してロールプレイを楽しそうに演じる。

その次に、bee, sheepといった単語に共通している文字を探させ、eeという文字の発音について学んでいく。sleep, bee, feet, sheep, three, seed, teeth, peepについて練習をする。

また単語の意味を理解させるために先生が動作で演じていた。たとえば speech の例を、先生が上手に示していた。(教卓の前で「ladies and gentleman・・・」)。peep (のぞく) についても、いかにも、それにふさわしいように、教室の外に一度出てドアをあけて覗き見る動作をしていた。

さらに、たとえば queen について、「qu/ee/n」と分解し、この時に、上腕、肘のあたり、下腕を押さえながら、身体で子音+母音+子音といった音節を理解させようとしていた。そして、queen を使って「who can make sentence ?」と発問したところ、「The queen is angry.」「This is the queen.」「The queen is fat and angry.」というセンテンスが、児童から次々に出てきていた。

途中で、「green sheep を助けよう」というゲームがあり、かなり多様な工夫がなされている。たとえば、班(縦4列の列で一つの班となり、4班構成)ごとに競争させ、正答した場合には、黒板上にあるアイスクリームの絵の上にさらに重ねていく。児童の好物のアイスクリームを使っているため、児童たちも楽しそうに学んでいる。

最後は、「Read a story」で、「The green family goes out」を読む。内容は、以下の通りである。

One, two, three. Three sheep./The jeep stops under a tree./ One, two, three. Three geese./

Where is a little sheep. /Little sheep, Little sheep./They find a little sheep in a tree./The jeep stops under a tree. である。班に分かれて、児童に読む練習をさせていた。

最後に出された Home work は、「Make some sentence or chants with the words we learned.」

40分の授業の中で、聞く→話す→読むまでが一貫してなされていて、さらに宿題として、書くことで学習の定着と発展を図っている。授業としては非常によく組織化されているという印象を受けた。

また、指導者のC先生も、赴任したてというが、極めて優秀で、児童が答えると、thank you と言ったり、児童に Don't be nervous ! と言ったりして励ましていたことが、印象的であった。

(3) 思想品德 (3年)

45人のクラスで、机をグループごとに並べていた。同クラスは1年の時から、英語を学んでいるクラス(週8コマ)で、D先生は、教歴が2年である。

学習内容は、「The boy who cried wolf」である¹¹。いわゆるイソップ童話の「オオカミ少年」であり、羊飼いの少年が退屈なので村人を驚かそうと、オオカミが来たと嘘をついた話である。最初は村人が驚いて飛び出してきたが、3度目に村人は少年が嘘をついていると思って無視したため、少年の羊がすべて食べられてしまったという有名な話である。

黒板には、

boy bored → happy → sad

village people angry → furious → ignorant

と記されている。

話の内容についての学習を終えた段階で、「group discussion: What do you want to say to the little

boy?』という課題が出され、班（4人）に分かれて、児童が英語で話し合っていた（あまり熱心に話し合わない男児もいた）。

ただ、このグループ・ディスカッションの後、児童がロールプレイでこのストーリーを演じた。なかなか本格的で、村人を演じる児童は、D教師から渡された麦わら帽子をかぶったり、鋤きを持ったりしていた。グループ・ディスカッションであまり身が入らなかった男児は、村人の役で、オオカミ少年に正直であれと諭していて、非常に楽しそうであった。児童に役割を与えることは重要である。

次に、映像を見せた（この学校の児童が出演）。一つは、拾った本を教師に渡す映像。handing in a lost bookが、honestであるかどうかを児童に質問し、児童は一斉にhonestと答えていた。次は、テストでカンニングをしている映像で、これがhonestかdishonestか尋ねた。児童からdishonestの回答があったあと、D教師が児童に、なぜ、これはだめなのか、頭で考えさせていた。挙手する児童は、少なかったものの、きちんとした文章で答えていた。

最後は、「Let's be honest/When we are honest, people will believe us./ When we are dishonest, people will not believe us. /We should be honest to our parents, friends, teacher and the other people.」という文章がスライドで映し出されていた。人間正直に生きることが大切だ。嘘についてはいけない、というのが、学習内容であった。

また、締めくくりのHome workは、1, Retell the story to your parents. 2, Continue telling the story. というものであった。

(4) 反省会

授業の見学が行われたあと、反省会が開かれた。筆者自身は、フォニックスの担当のC先生のアクションが大きく、英語を楽しそうに話していることを指摘した。C先生からは、とにかく、英語の授業は楽しい雰囲気で行いたい、楽しそうにテンションを高めでやることを、心がけている、とのことであった。

また、道徳の授業について、D先生はhonest, dishonestという使い方をしていたが、この判断は難しいのではないかというコメントが他の教員からあった。この点について、D先生からは、honest, dishonestという使い方は通常使っている、宿題をごまかして提出しない場合には、dishonestと告げている、とのことであった。

ただ、この指摘のように、すべてがhonest, dishonestに割り切れるわけではない。そうではないグレーゾーンもあるように思われるし、相手のことをおもんばかって、正直に言わないこともある。

英語の時間数を増やすための工夫として、道徳を英語で行う場合、細かい部分でのニュアンスが伝わらないのではないか、白黒をはっきりとつけてしまうことはいいのだろうか、という感想を見学した日本側教員が持ったのも確かであった。

5, 考察

以下、まとめとして、2校のイマージョン英語教育実験校の学校訪問、研究授業の見学、及びその後の反省会、関係者インタビューを通じて、感じたことを記しておきたい。

(1) 中国における英語教育の特徴

まず、イマージョン教育の検討を通して感じた中国における英語教育の特徴として、5点を指摘したい。

① 中国人の教員が流ちょうな英語で英語の授業を行っていたこと。

イマージョンプログラムの教員採用の基準は、「学位というよりも流ちょうな英語が話せること」である。授業を行った教員は、教歴が2～3年程度であり、なおかつどの教員も国外留学経験はなかった。中国の高等教育機関が、これだけ流ちょうな英語を駆使できる小学校英語教員を自前で輩出していることは、注目に値しよう。

中国における外国語教育は、徹底した音読と暗記の繰り返しによって、言語を身体化することを特徴としている。こうした大量の input で身につけた英語力が、教師の自信の土台にあるように思われる。

また2001年以降の小学校英語教育の導入以降、小学校から英語を学ぶ層が大量に出現しており、そうした厚い層が優秀な小学校英語教員を輩出する母体となっている。

中国の上海などの資金力のある幼稚園においては、初学の段階は極めて重要ということで、ネイティブの教員が英語の指導を行っているケースも少なからずある。しかしネイティブで優秀な教員の採用は資金の問題がありハードルが高い。とりわけ内陸部の都市では難しい。

しかし、中国人の教員がネイティブなみの流ちょうな英語を駆使して英語を行うメリットも多々ある。見学した学校の場合、ネイティブでないことによって、むしろ、「教師がロールモデル」となり（指導者談）、努力すれば、英語の先生のように流ちょうな英語が話せるようになる、といった励みになっている。

日本の場合、ネイティブであることに拘わりALTを採用している。しかし教員がネイティブであることで、むしろ、「ネイティブの人は、特別。自分は日本人なので英語ができなくても仕方がない」、という考えに通じることが危惧される。

② 教材開発が進んでいること。

概して、中国の小学校英語教育においては、視聴覚教材の開発が進んでいる。これは全国の農村地域、少数民族地域といった専門の英語教員の確保が難しく教師のレベルが不十分な所でも、英語教育を行うことができるようにするためである。筆者も、四川省や雲南省の農村の小学校で英語教育を参観したことがあるが、PPTや音声教材が盛んに用いられていた。余談ではあるが、僻地の

農村であっても、教員がウィチャットを利用した英語学習を積極的に行っていた（ウィチャットで音声講師に送ると、どこを改善すべきかアドバイスしてくれる）。

イマージョン実験校においても、プロジェクトチームのメンバーや教師の努力によって『総合英語』といった独自の教材が開発され、さらに中国の検定教科書の英語版が作成されていた。また児童の興味を引き立てる PPT も開発され、授業に参考になるビデオ（動画共有サイトの youku からダウンロード）についても情報が共有化されていた。こうした教材開発の蓄積があることで、大卒の新任の教員でも、着任当初からある程度レベル以上の授業ができている、という側面があるように思われる。

③ 教師中心型の授業によって、input が行われていること。また、文字学習が積極的になされていること。

1 年の段階で、かなりの単語を学習しているため、陝西師範大学実験小学校のように、2 年生（英語を学び始めて 1 年 2 ヶ月の段階）のフォニックスにおいて、sheep, green, tree, feet, peel, jeep, queen といった ee の綴りの単語を集めて授業をすることができている。児童に身近な日常生活に即した内容の単語も多い。

見学した授業は、両校ともにクラスの人数が、40 人～45 人とかなり大規模であるが、こうした状況で外国語学習を行う場合、教師中心型は合理的な方法とも言える。

さらに中国の場合、教師中心型で授業を展開しても、児童がそれについてくる学習に対するレディネスがあるように思われる。この点は、日本との違いがあるかもしれない。

また、文字学習が積極的に行われていることに加えて、単語を使って文章を作る働きかけがたびたび行われていた。たとえば、授業の中で、「make sentence」という教師からの投げかけに応じて、「jeep」をつかって「This is my jeep.」、あるいは「queen」という単語を使って、「Queen is fat.」という文を児童は作っていた。

また、教師も単語だけで、児童が答えた場合、文章にして答えさせるように指導を行っていた。文字学習を重視していること、合わせて文章を作ることを重視しているため、4 年の段階では、かなり英作文も書けるようになっていくことも特筆すべきであろう。

④ イマージョン教育が、エリート校以外の学校においても展開され、教育効果を上げていること。

たとえば陝西師範大学実験小学校は、農村からでてきた出稼ぎ労働者の子どもを中心とする学校である。家庭において英語を話す言語環境にはないし、親も英語を指導することはできない。学校のランキングからすれば、おそらく中よりも下に位置する学校であろう。また、児童のほとんどは、幼稚園では英語を学ばず、小学校 1 年から英語を学び始めている。

それにもかかわらず、4 年生のクラスで、グループ別討論の中で英語を使って話し合いが行われた、あるいは少なくとも英語を極力使って話をしようとしていたことに驚かされた。また英語を話

すことを楽しみ、自分たちはこんなに英語を話せるということに誇りを感じているように見受けられた。換言すれば、英語を話すことが児童の自信につながっているようにも思われる。

中国における先進的な英語教育は、エリート校に限った現象ではないこと、広い層において英語教育の底上げが行われていることに、留意しておきたい。

⑤ 反省会での議論が活発であったこと。

見学させてもらった模擬授業には、プロジェクトメンバーの西安外国語大学の教員や同小学校の英語教員だけでなく、他校の英語教員も参加しており、授業終了後に反省会が開かれた。そこでの議論がかなり突っ込んだ内容であったことに驚かされた。

日本であれば、同一の専門分野であっても、お互いに遠慮して述べないようなことも、極めて率直な意見が述べられていた。また、授業担当者自身も、今後の参考になるので、是非、改善すべき点を述べて欲しいという態度であった。

中国の場合、模擬授業を積極的に行うことは、教師としての勤務評価につながっている。また小学校英語教育のコンテストがあり、そこで優秀な成績をとることが、その後の給与の査定や、より条件の良い学校への転職につながる。こうした教師同士が競い合い高め合うシステムが、授業改善の原動力になっているように思われる。

また、日本からのゲストがいたため、ゲストに配慮して英語を使おうということもあったのかもしれないが、西安外国語大学の教授だけでなく、小学校英語の担当教員が英語だけでコメントを流ちょうに述べていたことにも驚かされた。

(2) イマージョン教育に関わる課題

イマージョン教育に関わる課題として、3点を指摘しておきたい。

① 専門的な内容をイマージョン教育で行う困難性。

たとえば道德の授業を英語で行った場合、細かいニュアンスが、伝わりにくいという点があるように感じられた。たとえば、陝西師範大学附属小学校4年でのお手伝いについての授業では、お手伝いをしてその代価を得ることは良くない、という結論であった。従って、お手伝いをして代価を得ようとした George は、wrong という結論であった。

しかしながら、この点は、反省会の中でも、教師から指摘されていたことであるが、考え方によっては、お手伝いをして小遣いを稼ぐことは、子どもの自立を促すという考え方もある。文化による違いもあるだろうし、曖昧な部分もある。こうした場合、英語を使ってしまうと、微妙な部分での表現がしにくく、紋切り型に黒白をつけてしまうのではないかと感じた。

② 教科の担当教員における専門的な知識の不足。

これは、(1)とも関連することであるが、教科内容と言語習得のバランスは、難しさを伴った課

題である。今回、陝西師範大学金泰假日花城小学校でも、科学（生物）の授業を見学する機会を得たが、英語の教員が科学を教えていた。そのため、授業終了後の反省会で、専門的な知識が少し不足していたという指摘が、大学の生物担当教員からあった。

イマージョン型の教育を行う場合、英語が自由に操れることが必要であり、英語の教員が教科を教えることになる。しかしながら、教科の専門的な内容をどのように獲得していくのかは、課題であるように思われた。

中国だけに限らず、英語が堪能であり、なおかつ専門に通じている教員の養成は難しいことが理解された。

- ③ 同一のクラスにおいても、英語のリスニング、スピーキングにおいては、児童間の格差が存在していること。

陝西師範大学附属小学校の4年のクラスの中に、非常に発音が綺麗で流ちょうな英語を話す女兒がいた。聞いたところ、アメリカで生活した経験のある児童であった。一方で、教師の英語を聞き取れないため、教師の質問への答えが的外れであったり、また授業中に、ほとんど挙手をしない児童もいた。

外国語の言語学習においては、家庭教育の影響も大きなものがある。英語が流ちょうに話せる児童は、家庭教師をつけたり補習で学んでいるという事情もあるらしい。イマージョンのクラスでは、とりわけ児童間の英語力の差が出やすいのではなかろうか。このあたりの格差をどのように埋めていくのが、授業担当教員も指摘するように、今後の課題のように思われた。

まとめ

本稿では、中国の都市部で実験的に実施されているイマージョン教育（浸入式）について検討することを通じて、現在の中国における小学校英語教育の現状と直面する課題について考察してきた。その上で、陝西師範大学附属小学校及び陝西師範大学実験小学校での調査から得た知見を論じた。

全体として中国の小学校英語教育は、2001年以降の約15年間の間、教員養成や教材開発について多くの課題を克服しながら、英語教育の土台を形成してきたことを実感した。とりわけ、英語の教員が専科であり大学で英語及び小学校英語の教授法を学んできていることが大きい。

中国の小学校英語の先生との交流会の席上、日本の小学校英語教育は、外国語活動として5年から1コマと紹介したところ、それで日本は本当に大丈夫なのかといった調子で聞き返されたことが印象的であった。

小学校段階からの英語教育の導入に関して、日本では様々な議論があり、現在も続いている。また、バイリンガル教育の理論的基礎を築いた Jim Cummins のように、第二言語教育の習得において母語習得の重要性を主張する論者もいる。

ただしグローバル時代の中で、英語の重要性は増している。また、東アジアの諸国において、小学校段階からの英語教育の導入が始まっている。隣国の中国が、英語でコミュニケーションができるこれだけ大量の人材を輩出していることは、看過できない現実であり、日本においても、日本語と英語とを操ることのできる人材を育成するのは、急務と言える。

しかしながら、現行の体制や教員養成制度のままに、英語教育を導入するのであれば、英語嫌いの児童を産む、あるいは、家庭に経済的な余裕があって英語教育の補習を受けることができる条件のある児童と、そうではない児童の格差を生むだけに終わってしまうという危惧もある。今後、どのように日本における小学校英語教育を展開すべきか、残された課題は大きい。

追記

本調査は、科研基盤 (c)「超大国を目指す中国のグローバル戦略の検討―小学校英語教育に関する日中比較研究―」(研究代表: 小林 (新保) 敦子, 平成 28 年度～30 年度) の助成による。また、調査にあたっては、「中国カナダアメリカ英語イマージョン教育研究プロジェクトチーム」の西安外国語大学の遲延萍先生、呂允麗先生、李本現先生、陝西師範大学実験小学校前校長の高紅健先生、北京師範大学の裴淼先生をはじめとする関係者の皆様に御世話になった。心から謝意を表明したい。

[注]

- 1 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1343856.htm
- 2 新保敦子・阿古智子『中国 超大国のゆくえ 5 勃興する「民」』, 東大出版会, 2016 年
- 3 訪問調査は、原田哲男 (早稲田大学・言語学), 東仁美 (聖学院大学・小学校英語教育), 花井みわ (早稲田大学・第二言語教育) 及び筆者によって、2016 年 11 月 2 日～3 日にかけて実施された。筆者自身は、中国教育の専門であり、英語教育に関しては専門外であったため、各先生からのご教示に感謝している。特に原田先生には早稲田大学大学院原田ゼミで院生とともに、陝西師範大学実験小学校のビデオを分析する機会を与えて頂き、英語を専門とする院生から学ぶことが多かった。謝意を表明したい。
- 4 張効珍, 裴淼「小学英语浸入式課程与教学実験中的問題」, 『基礎英語教育』, 第 7 卷 5 期, 2005 年, 9-11 頁。喻春兰, 強海燕「英語浸入式教育在中国」『比較教育研究』, 2009 年第 9 期, 2009, 89-90 頁。
- 5 遲延萍, 趙微「我国小学英语浸入式教学実験総述」『比較教育研究』, 2004 年第 7 期, 2004 年, 13-18 頁。Ellen Knell, Qiang Haiyan, Pei Miao, Chi Yanping, Linda S. Siegel, Zhao Lin, Zhao Wei, Early English Immersion and Literacy in Xi'an, China, *The Modern Language Journal*, 91, 2007, pp. 395-417
- 6 西安におけるイマージョン教育は、英語教育の研究者として著名な強海燕氏の指導の下、実施されることになった。強氏は、西安の陝西師範大学の教授であったが、後に広州の華南師範大学に移動。それに伴い、イマージョン教育が、広州でも展開されるようになったという。
- 7 <http://www.ssdfx.com/web/> (最終閲覧日 2016 年 11 月 10 日)
- 8 北京大学附属小学校での調査, 2016 年 10 月 20 日。
- 9 <http://www.snnusyxx.com/> (最終閲覧日 2016 年 11 月 10 日)
- 10 于欣〈Sound of letters ee 教学設計〉
- 11 李丹丹〈lesson7 The boy who cried wolf〉